

「X線撮影法のポイント」

A Manual of Radiographic Positioning

〔著〕 G. B. Greenfield., S. J. Cooper

〔監訳〕 田坂 皓 東京大学教授

〔訳〕 秋貞雅祥 三井記念病院部長

慶応義塾大学教授 西 岡 清 春

臨床医学においてX線診断法の価値は他の理学的諸検査の中で最上位にあり、今後もそうであることは間違いないと思われる。しかし、他に比肩しうるものがない重要な臨床情報を呈する反面、X線被曝というデメリットもあり、やみくもにX線検査を施行することは避けなければならない。この適応の基準となるのが臨床所見であり、特殊X線検査の導入の基準となるものが一般撮影である。近年、観血的X線検査法が激増しているが、その基礎となる一般撮影の重要性は今後も変わらないであろう。

Greenfield 著「A Manual of Radiographic Positioning」は、この一般撮影の技術と出来上ったフィルムの読影に当って、知らなければならないレントゲン解剖およびフィルムの良否を知るチェックポイントについて明解に記述されており、フィルム、解剖の挿絵、線画が誠に実用的に盛り込まれた著書である。

今回、この著書の訳本として「X線撮影法のポイント」が東大・田坂皓教授監訳、三井記念病院・秋貞雅祥部長訳で出版されたのは誠に時宜に適したものと思われる。

田坂 皓教授、秋貞雅祥博士は私が日頃から尊敬している放射線医学者であり、田坂教授は血管造影、秋貞博士はリンパ管造影および軟部組織撮影（甲状腺、乳房）において数々の立派な業績がある。

本書では、頭蓋、上肢、下肢、脊柱、腹部および骨盤、胃腸および胆道系、泌尿生殖器、胸部、心臓、乳腺について、その一般撮影とレントゲン解剖が正確な邦訳で示されている。とくにレントゲン解剖については邦文と英文が並列されており、メディカルタームの使用に慣れている日常において英文が併記されていることは誠に便利でありがたいことである。

邦訳にあたって著者は、言葉の使い方について熟考しており、解剖学用語は日本解剖学会の用語を用い、

撮影技術上の用語については生硬な解剖学的用語よりも常用語ないし意訳が適当と思われる場合はそれを用いているのは実に行き届いた神経である。

本書は、医学生にとって、各領域のすべてのフィルムのチェックポイントが記載されていることから、まずいX線フィルムと良いX線フィルムの鑑別能力を養うのに便利であり、放射線技師にとっては標準的位置決め法を教える貴重な参考書として推せんする。またX線装置を使用する医師および放射線科レジデントにはX線撮影の手引きとして最も役に立つ本であろう。また放射線専門医にとってもリポートの時のレントゲン解剖名の忘却を補足し、記憶のあいまいさを正す好著として推せんする次第である。

A 4 変型 頁406 図224 写真304

¥9,600 円300

医学書院刊